

切れないのである。そして、孢子と種子とを比べた場合、孢子は葉緑体をもっており、すぐさま自活を強いられる。それに比べ、種子は十分に栄養のある「べんとう」をもたされている。だから休眠もできる。これでは、勝負にならない。これで、孢子の〈粗製乱造〉の意味もわかるというものである。

このあと、「種子の身体検査、発芽させよう、裸子と被子植物、草と木」の学習へと発展させた。

〔参考文献〕

- 極地研テキスト『植物の世界』
- 九州生物学教育研究グループ『植物の世界』
- 『生物をどう教えるか』(黒田弘行著, 新生出版)
- 『植物のくらし』(前田幹雄編著, 新生出版)
- 『植物のくらし』(延原肇著, 評論社)
- 『兵庫の山菜』(室井緯著, 神戸新聞出版センター)

(兵庫・神崎郡 香寺中学校)

理科教室 「82.9.10月号」より

これは、地下差10号にのせたもののつづきです。授業をやったのが昨年であり、資料も不十分のため、子どもたちの姿が見えてくるという報告には、まだまだです。授業全体の骨組みは、今のところ、変える必要はないと思っていまし、母人数のことも考えて、少し省く必要はありそうです。もっと「みくらます」ところもありそうです。今年、中谷さん(香香中)がたいへい、これにきつた、「植物の世界」のスライドをつくって実践しています。おもしろい実践報告が期待できそうです。

九州の生物教育

本「生物の世界と子どもたち」 「生きまのひとの学習」

九州生物学教育研究グループ 著 たたら書房 前著 42000
後著 41800

これまで、九州の人たちは、「動物の世界」のテキストをつくって、中学生がはじめて学ぶ「生物の学習」のプランを右向けてくれていた。そのテキストは、九州の人たちのみならず、全国の多くの実践家に影響をおよぼしてきていた。それなど、そのテキストを何回か使わせてもらっている。「...も彙ではない」と表現されるギリギリのところで生きる動物の生きががよく見えるところが、ボウのホレこんでいるところである。その後、「植物の世界」のテキストも出てくる。前著は、この2つのテキストづくり、実践が本心である。後著は、それにひきつづき、部分の実践がある。この二著で、中学の生物学が俯瞰できる構成になっている。そのみならず、サークルからグループへ、そして授業実践へ、「テキスト」づくりと、熱き生物学教育運動への呼びかけにもなっている。